ARCHITECT

Japan Institute of Architects

1990 3 — MAR

CONTENTS

●こどもと建築（3）　遊具のデザイン　仙田　満
●都市への提言　地上げ屋考　福島　重雄
●都市景観づくりはフュージョン感覚で　南石　周作
●ＪＩＡ北海道支部、北海道知事に要望書を提出
●私の生き方　蝦蟇に教えをうけ、野の花に建築の理想をみる　村松　正恒

JIA 社団法人新日本建築家協会東海支部愛知部会

No.18

ARCHITECT
90. 3 . MAR

CONTENTS
目次

Essay
会員ずいひつ―屋根・塔 ―― 2
高木淳一郎・高山順行・藤田義勝

Suggestion
都市への提言
地上げ屋考 ―― 福島　重雄 ―― 5

こどもと建築（3）
遊具のデザイン ―― 仙田　満 ―― 6
偉大なる迷える子羊に捧ぐ ―― 遠藤　茂之 ―― 9
都市景観づくりはフュージョン感覚で ―― 南石　周作 ―― 10

Woman
窓はインテリアのかなめ ―― 藤田　淑子 ―― 14
新入会員紹介 ―― 寺倉　勇・藤本　克己 ―― 13
ＪＩＡ北海道支部、北海道知事に要望書を提出　ＪＩＡ北海道支部 ―― 12
私の生き方―蝦蟇に教えをうけ、野の花に建築の理想をみる ―― 村松　正恒 ―― 15
情報コーナー ―― 18

Book
新刊案内 ―― 11
編集後記 ―― 20

表紙デザイン　カミムラショウサク（E. D. LABO）

会員ずいひつ
屋根・塔

『塔』雑感

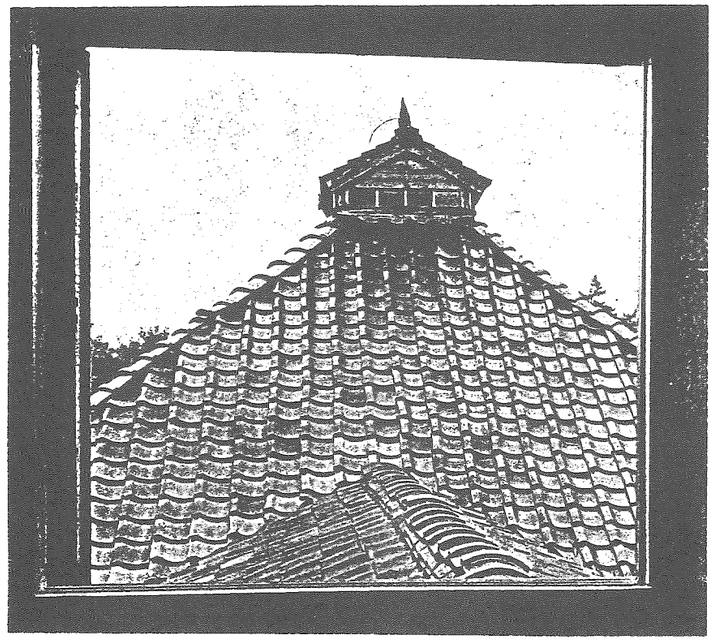
高木淳一郎

エッフェル塔が建てられて1989年で100年になりました。鉄材によって作られた高さ300メートルの記念塔としての技術的、美術的、歴史的な意義は周知のところです。以後の塔と称される建造物は建築技術の発達とともに、その高さを競ってきました。摩天楼とも称される高層建築物もその範疇にいれられています。翻えって鉄が建築の構造材として使われる以前の塔は、石やレンガの組積造か、木軸架構の塔を思い起こします。日本においては、塔と呼ばれるものは通常は、寺院の仏塔を指していたと思います。五重の塔、三重の塔、多宝塔など木造の塔であり、1000年におよぶ歴史を伝えるものや、その高さにおいて50メートルを超えるものもあることに驚嘆し、その造形の美しさと匠のわざに感心させられます。仏塔は釈迦の舎利を納める墓のシンボルであるといいます。従って塔の多重の上層階に使用目的はなく、一層目だけ荘厳（飾りつけ）をしていて二層目以上は形を整えるためにあるといえます。

塔は高くそびえるものであるがゆえに、視覚に強く訴える力をもち、附近の景観を左右するものとなります。そして何らかのシンボルとなり、モニュメントでもあり得る重要な造形であるといえます。景観構成の要素として、塔状建造物の造形は注目されるところです。

ところで「塔」ではないのですが「塔屋」について一言したいと思います。建物をつくるとき、その周辺の景観を考えないで設計するわけにはいきません。建物の屋根の形、塔屋の形がその景観構成に大きくかかわることはいうまでもないのですが、現在の建物にみる塔屋の造形には、そのようなことを考えていないようなものが多々見うけられるのは残念なことと思います。自省して設計にのぞみたいと思う次第です。

（㈱伊藤建築設計事務所）



「屋根のかたちは建物のイメージを変える」

高山　順行

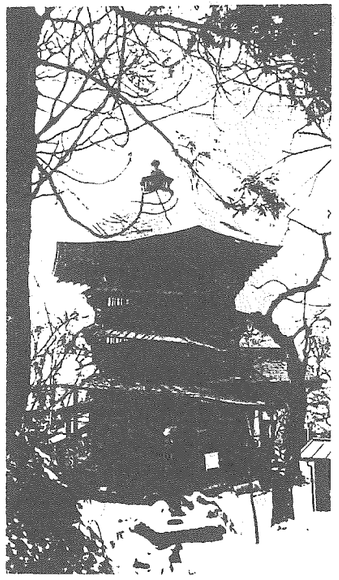
建物には必ず屋根がある。その屋根の形は建物の姿・形・性格のイメージに、大きく影響を与えてしまうものである。優しくも厳めしくもなり、またリズミカルにもおっとり延びやかにもなる。

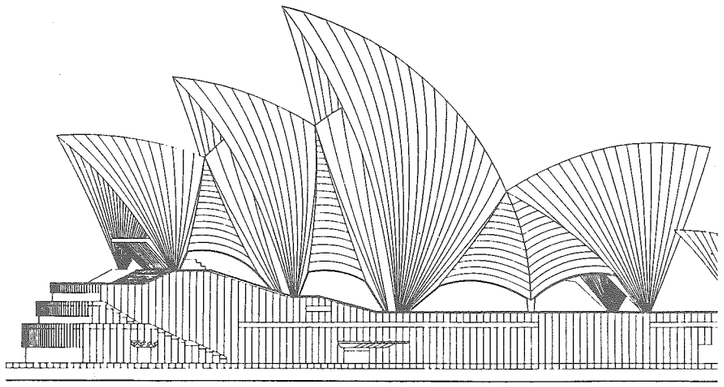
日本の国土を飛行機から見下ろすと、田畑の縞模様がつらなり、人家の瓦屋根が連続する。小さな空間をたてつらね、よせ合わせて空間をひろげていく。これは、傾斜地が多く木材を用いた構造法の日本では、機械化がすすみ、構築法が進歩しても、つらねて伸長拡大する習性が引きつがれているからだろう。

桂離宮は対角線方向に雁行というかたちで建てつがれていったため、一つの大きな屋根からうける威圧感がなく、深い陰影をくりかえして、一つの場面から次の場面へと展開していく。それをわれわれは延ばしながら観賞し、前の場面は次の場面を呼び、またあとの情景をむかえて連続していく。しかも一つ一つの場面は、それぞれにひとつの絵として完成している。

屋根の形はこの意図するつらなりに大きく影響し、リズムはくりかえされていく。つらなりのかたちは終わりをしらない無限の律動である。私は大変にこの連続が好きだ。

感心させられる屋根のかたちがもう一つある。三重塔・五重塔・十三重塔である。高いにもかかわらず安定してみえるのは、屋根を重ねているせいだろう。昔、三三九度の盃を重ねて結婚の契りを固める、重ねることで気持ちがきまり安定する、ということを耳にしたことがある。重ねて安定させ、美しい断面を見せていることと共通しているらしい。これも日本の伝統かも。





屋根の形でまったく相反するかたちがある。起こりと反りとは反対の形である。反りは外にむかってたつ男性的様相なら、起こりは伏しておだやかな女性的姿である。この相違は反り屋根と起こり屋根の、周囲におくるひびきのちがいであろう。屋根のほんのすこしのかたちのちがいが、まったくその建物の性格を変えてしまう一例であろう。

いずれにしても、屋根のかたちは建物のイメージに大きく影響を与えてしまうものである。　（㈱日建設計名古屋事務所）

屋根・塔

藤田　義勝

建設省告示53条800号

延床面積が300㎡以下の小規模の建築物には屋根を設けなければならない。また1000㎡を超える大規模建築物には塔を設けなければならない。この号にいう屋根とは勾配屋根、ボールト屋根等陸屋根以外のものをいう。

塔に関しては面積、高さ等特別の規定はないが、屋根等とバランスのとれた美しいものでなければならない。風見魚（鳥ではない）等ユーモアのある装飾を付した塔には、その出来映えに応じて、建築美審査会風見魚等特別委員会の認めたものに限り何がしかの補助金を出すものとする。

ただし心ある建築家の設計の建築物にはこの告示は一切適用しない。

心ある建築家とは建設省住宅局昭和21年発行の通達第931号による。

通達第931号

心ある建築家とは法的規制が無い方が正しい建物を設計出来る人をいう。厳密には、その資格を有する建築設計者はごく少数と思われるので、概ね、新建築家協会員はその資格を有する者とする。ただし金もうけセンスが美的センスより上廻る協会員は除く。その替わりに協会員でなくても建築美審査会特別委員会において、美的センス有りと認められた者は心ある建築家と見なす。尚、審査会委員はすべて人格者で構成されているので、間違っても袖の下等の、正しくない人がよく使う手段は通用しない。蛇足と知りつつ書き加えておく。

「所長、何か変な文書がＪＩＡから

ファックスで送られてきましたよ。」ちょっとコーフンしてスタッフの鍋田君がファックスを持って来た。「どれどれ」といって目を通してみたのが上の条文であった。

「ところで、君たち、この告示どう思う。」うちのスタッフの鍋田ヒロシに聞いてみた。鍋田ヒロシはうーんとうなりながら、「小規模の建物に屋根を付けろ、というのはどういう法のセーシンでしょうねー。所長。」

「あのなー、わしはこの告示なかなかおもしろいと思うで。あの頭の限りなく固い建設省住宅局のおじさんにしては、粋な告示を出したもんだと感心しとる。小規模の建物に屋根を付けろっつうのは、な、小規模の建物はちゃんとした設計者が設計するケースが少ないだろう。たいてい工務店の営業マンか社長に『ちょいと図面描いてくれや、確認だけ取れる図面でえーけんねー』とかいわれてぶざまに生まれてくる図面がほとんどだよな。だからその“確認”のときにデザイン要素の王様である屋根を付けるべし、としたのはいいと思うな。拍手してやりたいよ！」

「まあ、へたな平面でも屋根とか塔を付けると見られる建物になるからな。また大規模の建物には街のランドマークになる塔のようなものの設置を義務付けてもいいわな。」

「所長、心ある建築家の設計の建物には、この告示は適用しないというのはなかなか粋なはからいですね。特にその定義がいいじゃないですか。所長は少なくとも金もうけはヘタでデザインはうるさいからその意味では心ある建築家ですかねー。」

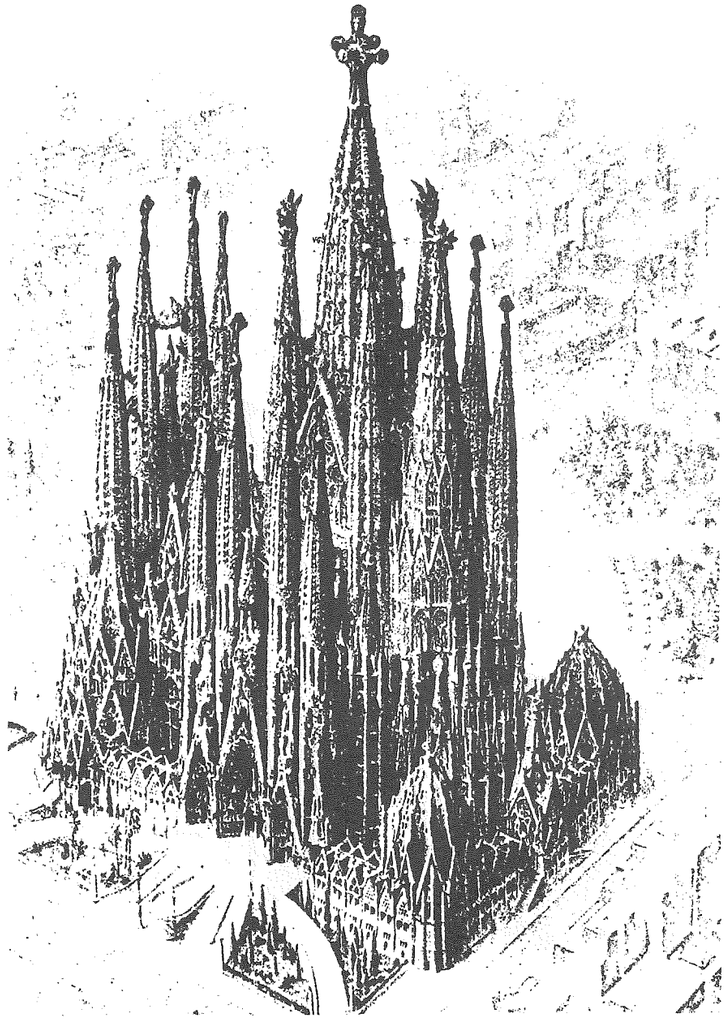
「アホなこというな！そうに決まっているじゃないか。第一うちの設計した建物はみな屋根や塔が付いているじゃろうが……。屋根や塔が無い建物はよっぽどうまい建築家か、何もしらない図面屋がやるもんや。」

「そーゆうもんですかねー。」「そーゆうもんじゃ。」

こんなやりとりを聞いていた、事務所を始めて以来ずっと事務と雑用をやってくれているかつ江嬢が口をはさんだ。

「ヤーネー、ヒロシ君。私、そんなこと、とうの昔から知っとったよ。」

（藤田建築設計事務所主宰）



都市への提言

地上げ屋考

愛知県住宅供給公社専務理事
福島重雄

最近、街のいたるところで再開発の雄叫びが聞こえる。しかし、まだ誰が見てもナントカしなくてはと思わせる場所がヤタラ目につく。

狭いうえ老朽化したため、空室の目立つ木賃アパート、傾いたまま放置された長屋、使われていないボロ倉庫などなど。現に住宅だけを見ても10世帯に１戸の割合いで空家があることが、住宅統計調査で確かめられている。愛知県だけでも10万戸の空家が街の中を占拠していることになる。

これら老廃建物の集積は、街の美観を妨げ、都市防災の危険因子となるだけでなく、都市経営のうえからも大いなる損失をもたらす。

せっかく大量の資金を投入して道路、上下水道、電力、通信網、公共交通機関を整備してもその効率はいちじるしくそがれる。声高に再開発が叫ばれるのも都市の悲鳴と聞こえなくはない。

さて、街の再開発の立役者は誰か。一方の旗頭には、土地区画整理法や都市再開発法を武器とし、補助金の実弾で援護される地方公共団体などが挙げられよう。旧名古屋市全域をカバーした戦災復興土地区画整理事業は、巨大な規模と敗戦直後から40年を越えるというロングランの興行を成功させた名古屋市の仕事であり、一方では住宅都市整備公団と組んで全くのドブ池であった白鳥の貯木場を高層住宅街に変えてしまうことも目論んでいる。もちろん、周辺都市における都市再開発事業も花盛りといえよう。

しかし、もっとも大量に、かつ目覚ましい働きを見せているのは、いわゆる地上げ屋部隊ではないかと私は考えている。

いま地上げ屋に対する世間の――というよりはマスコミの風当たりは強い。曰く“地上げは諸悪の根源である”“地上げ屋は国民の敵である”。なぜならば、地価を不当に吊り上げる、暴力を使う、ボロ儲けをする、脱税をする。その結果、国民生活に甚大な損害を与える。
云々……。

最近わが家の周辺で地下鉄工事が始まった。とこれに合わせるかのように、傾いた長屋が、木賃アパートが、壊れかけの倉庫が消え失せ、ビックリするような広々とした空地が次々に姿を見せ始めた。

聞けば、地上げ屋さんが猛然と動き出したとのこと。なかなかヤリオル。

結果は、まことに見事なスラムクリアランスであり、街の再開発への文字どおりの地均しになっている。手際もよく、スピードは滅法はやい。公共施行の再開発が、ゴネ屋や不満に手を焼きながら10年も20年もかかっているのに比べ、その早業は誰の目にも鮮やかである。

私は、自由経済体制の熱烈な信奉者である。利潤追求を最大の動機とする自由な経済活動を支配する市場原理に絶対の信頼をおいている。

また、こと経済活動に行政が介入した場合ロクな結果を生まないことも身にしみて感じている。生産規制、販売規制、価額規制、出店規制、どれ一つとっても必ず矛盾に満ちた歪みを産み残していく。

最近の社会主義経済のあいつぐ破産は、「神の手」と呼ばれる市場原理を無視した愚かな人間どもに対する当然の報い、といっては言い過ぎか。

改めていう。経済は市場原理に任せるべきと。

いわゆる地上げも例外ではない。土地取引は紛れもない経済行為であり、土地価額も需要と供給によってのみ支配される。

需要のないところに価額は発生しない。供給側の計算と需要側の計算が合致するとき、初めて地価がきまる。

自由な双方の合意に基づく売買を地上げ屋の大儲けがケシカランから悪だ……などとは的外れもいいところだ。

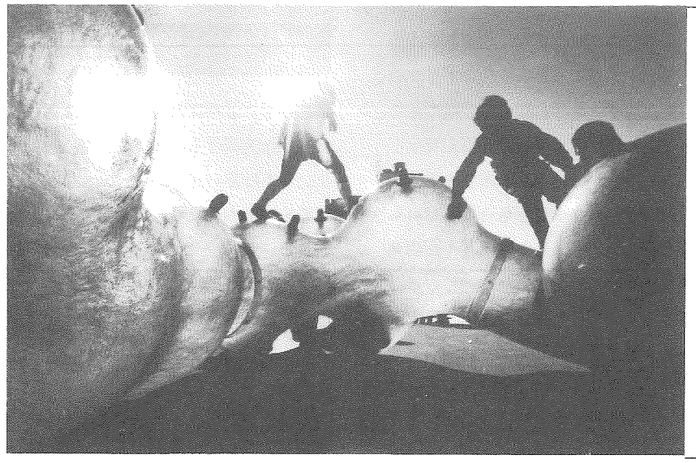
いま、わが国民は豊かである。土地を売らなければ飢え死にするような土地持ちはほとんどいない。いくらボロ家でも、木賃アパートでも、早く金にしたいとあせっているオーナーなどまず見当たらない。よほどの働きかけがない限り、休眠土地として惰眠を貪るのが通例である。これに命を与え、活躍の場へ送り出す作業が地上げであり、持主に合意させるまでの努力は尋常なものではない。高い利潤という動機なしに、あれだけ熱心に地上げができますか。しかも途方もないリスクを背負っての勝負、絶対儲かる保証などどこにもないのである。

地上げ屋の利潤が多ければ税金を取ればよい。脱税行為には制裁を加えればよい。暴力行為は警察力で抑止するしかない。

“札束の威力で”といっても、それが当事者双方の自由な合意であれば、立派な市場価額だ。需要を超える価額は、決して存在しない。

国民の７割以上が地主のわが国だ。地価高騰を引金とした暴動など当分おきそうにもない。

街の再開発の尖兵としての地上げ屋について、もう一度注目しよう。



ピングポング （撮影：藤塚光政）

こどもと建築（3）

遊具のデザイン

仙　田　　満
名古屋工業大学教授
環境建築家

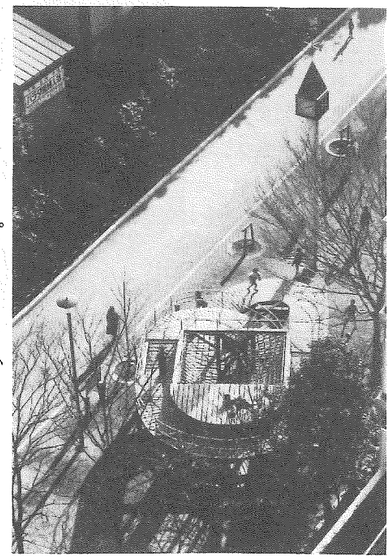
1．フランスのラ・ビレット公園は国際コンペになり、私もそれに応募した。バーナード・チュミが最優秀設計者になり、彼のいうフォーリーができつつある。また、ミッテラン大統領きもいりの科学館もでき上がった。一昨年、私は建設中のラ・ビレット公園を見学した。その一角につくられたこどもの遊び場の遊具を見て、私はおどろいてしまった。それは、ドラゴンと称される遊具で、私の友人も「あれはおもしろいよ、ぜひ見てきなさい」と、私にすすめた遊具であったが、私が20年前に仙台で巨大遊具としてつくった遊具のコピーなのである。素材やディテールのデザインはもちろん異なっている。しかし、チューブ状の遊具と三角形のジャングルジム、その上からすべりおりるすべり台という構成は全くそっくりである。明らかに、私が発表した本から私のデザインを借りて、デザインしたことはまちがいない。それは多分、チュミがデザインしたものではなかろう。しかし、私は誰がデザインしたかを詮索する気も持っていない。詮索したところで、抗議できるものでもない。全く同じ素材であるならばいざしらず、デザインや意匠の拘束性はきわめて薄いことは、私はよく知っているからである。

2．今から20数年前、建築家として独立した最初の仕事が遊具の設計だった。それは、大学を出て勤めた菊竹清訓事務所時代に設計を担当したこどもの国で知り合った厚生省の技官の紹介であった。大阪の児童遊園に設置する遊具を新しくデザインすることを依頼された。

別に明確な仕事の目安があって独立したわけではなかったので、「遊具のデザインなど建築家がやる仕事か」と一瞬躊躇したがすぐに引き受けてしまった。初めてなので、何もわからず、見よう見まねでデザインした。偶然、京都大学の藤本浩之輔教授がそのとき私のデザインした遊具の利用の仕方について調査し、「子どもの遊び空間」（NHKブックス）に発表されている。私の「巨大遊具」という発想ができたのは、引き続いて毎年依頼された遊具の仕事の3年目のことである。それが前にも述べた仙台の児童遊園の仕事であった。それまでは、ただデザイン的におもしろければ、こども達もおもしろがるのではないかと思っていた。「巨大遊具」は今までにない新しい遊具の形態をとさぐり、考えたコンセプトであった。

かつて、巨大な木はこども達にとって、あそび場のシンボルであった。そして、自然のジャングルジムであったし、自然のプレイハウスでもあった。ターザンごっこのできるブランコでもあった。さまざまなあそびができる巨大な立体遊具だったわけである。そういう、総合的で立体的な遊具を「巨大遊具」としたのである。遊具の中にストーリー性を導入することを考えたのもその頃のことである。

宮沢賢治の童話、『銀河鉄道の夜』を主題とした連続遊具を考えたりした。それから、20年近く、数多くの遊具をデザインしてきた。その多くはその場所、その場所にあったようにデザインしてきている。工業製品でなく、建築のように、敷地にあった遊具のデザインを行ってきた。しかし最近、こども達に質の高い良い遊具にふれる機会を多くするには、工業製品としての遊具も考えねばならないのではないかと実感してきた。そして、今いくつかの製品を世に出している。



オービック （撮影：藤塚光政）

3．公園遊具は昔から3点セットと呼ばれる、砂場、すべり台、ブランコが今でも主流である。この3つはそれなりに重要な遊具であることは間違いない。砂場は19世紀末、ベルリンから始まり、アメリカのプレイグラウンドで普及したといわれるが、小さなこども達のあそび場としてもっとも基本的な装置である。すべり台、ブランコはこどもの運動機能の開発に優れている遊具である。

しかし、すべり台、ブランコ、運てい、鉄棒、ジャングルジムなどは公園での青少年のための体操装置として開発されたものである。日本にも、明治半ばに上野公園で初めてこれらの装置が公園遊具として配置されたが、そもそも小さなこども達のためのものではなかったようである。どうも近年になって、遊具はこども、とくに低年齢のこどものための装置と位置づけられるようになってきた。私は、もう少し少年向きの遊具の設置も行われてもよいのではないかと考えている。さらに、かつて遊具は、こどもの体力向上のための装置であったが、現在ではどちらかというと集団あそびの装置という役割になるべきではなかろうか。

遊具とはそもそも、路傍の丸太のようなものである。こどもがピョンと飛びのり、どこまでバランスがとれるかこころみ、向こうからこどもが来て落としっこをする。そのような突然の行為を引きだすものである。そして、それが一人のこどものためのものでなく、それを媒介として、集団あそびのゲームが発生するものでなくてはならないのではなかろうかと考えている。

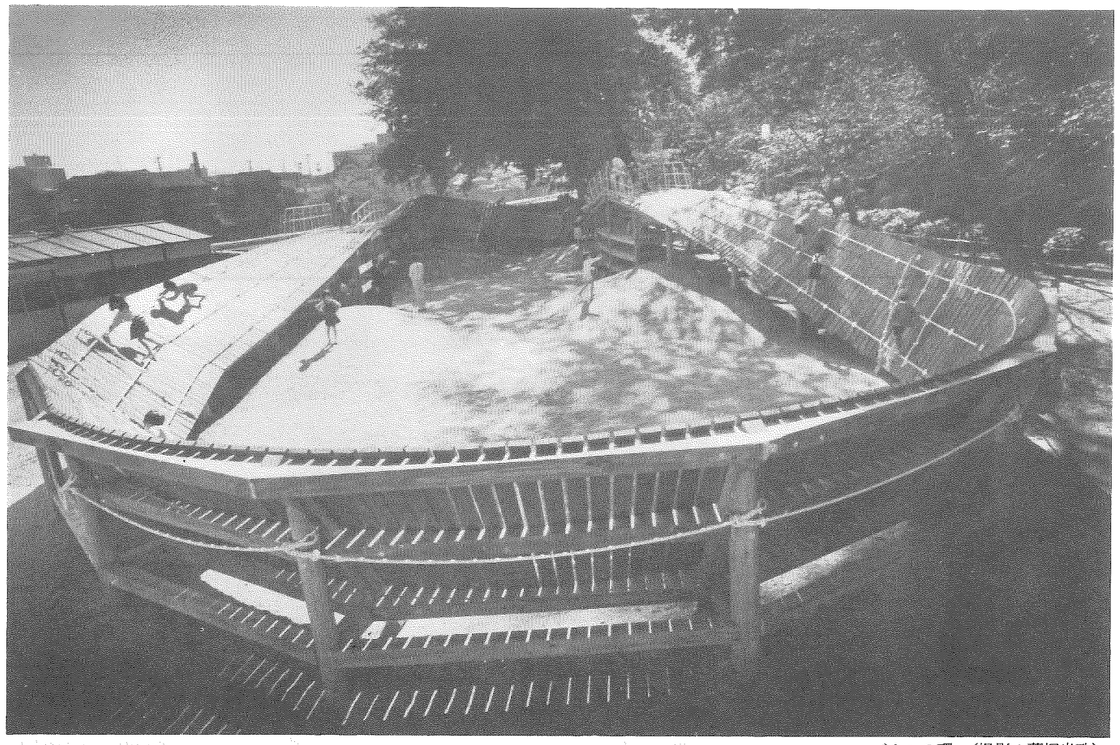
4．日本の遊具のデザインの流れは、外国のさまざまな公園デザイン、あるいは、インダストリアル・デザインの影響を受けているのであるが、大きくいえば、プレイスカルプチャーと呼ばれる遊具の彫刻化がこころみられた時代が昭和30年代前半にあり、また北欧のアドベンチャープレイグラウンドに影響されたガラクタ遊園、タイヤ遊園と呼ばれた素材型の遊具の時代が30年代後半にあった。

おもしろチューブ （撮影：藤塚光政）

私が「巨大遊具」を発表したのは、昭和40年代半ばのことである。その後、スウェーデン、カナダから数多くの木製組立遊具が輸入され、現在では一般公園においても、木製遊具が主流をしめるまでになっている。また、アメリカを中心として、遊具を自主製作する住民運動も出て、昭和50年代には日本でもその実例はいくつか見られた。

インダストリアル・デザイン的にいうならば、現在のこどもの遊具のデザイン的な開発はヨーロッパ、アメリカで近年あまりみられていない。木製組立遊具が主流になって、全体としてデザイン的にみると低調になっている。一つにはヨーロッパ、アメリカ、日本においても共通のことであるのだが、近年の安全性に対する過剰な反応があるためである。

安全基準があまりにもシビアーに確立してしまい、デザイン的な余地がなくなっているのである。幸い、日本ではまだ安全基準は確立されていない。した



メビウスの環　（撮影：藤塚光政）

がって、多少自由な展開が可能となっている。

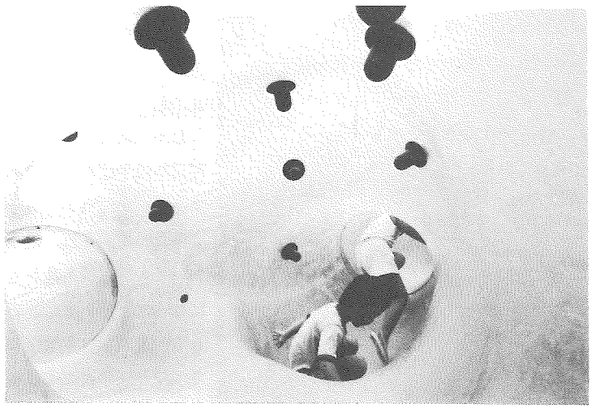
昨年、フランクフルトのパブリックデザイン展で、私のデザインしたＦＲＰの遊具を出品した。もともとヨーロッパで始まった遊具のデザインが、日本からヨーロッパに輸出される時代になったことはうれしいことであるが、それだけ日本がこどものあそびに対して先進国なのか、悲しいことなのか、複雑な気持ちである。

５．遊具は万能ではない。こどものあそびの中で、自然あそびやボールあそびを遊具が代償できるものではない。遊具をデザインしていると、「おまえは遊具さえあればよいと思っているのか」と詰問されるときがある。遊具はどんなに高く見積もっても、こどものあそびの 1/4をカバーできない。遊具は遊具でしかないのである。こどもには自然もオープンスペースも必要である。

しかし、すぐれた遊具はそれを媒介にして、集団あそびを形成することができると私は考えている。また、そのような遊具のデザインを私の遊具デザインの目標としている。

６．集団あそびを作り出すことのできる遊具は、ある構造を持っている。それを私は遊環構造と名づけている。その基本は、循環機能を持っており、その循環に多様な体験空間がとりつき、とくにメマイ体験があること、ショートサーキットする近道があること、全体としてポーラスな構造であることとしている。

遊具はある意味で、建築と同じであるが、こども達の自由な行動を生みだすという点においては建築よりも難しいということができるかもしれない。私はもう20数年、遊具をデザインしているので、「こども達は思いがけないことをする」と言い訳をすることができない。計算された仕掛を作りすぎないで、作ることを心がけている。まだまだ難しい主題である。



ピングポング　（撮影：藤塚光政）

偉大なる迷える子羊に捧ぐ

遠　藤　茂　之

ベルリンの壁の崩壊、ルーマニアの流血による民主化、ソ連のペレストロイカ推進、かつてない地球規模の激動の時代となりましたが、建築家の皆様も、多忙な日々をお過ごしのことと思います。

さて、日頃、構造設計に携りながら感じたり、考えていることをそこはかとなく述べさせていただきます。

まず、私と建築とのかかわりですが、若かりし頃ただひたすら数学を志していましたが、ある時「逢う時はいつも他人で」という映画を見て華麗な建築家の生き方に感動し、もし数学がダメなら建築をと思っていたところ、はからずも建築の道を歩むようになりました。しかし建築に入ったものの数学への思いを捨てきれず、学生時代は、数学の中で建築をやっていたようなものでした。

その頃、ガウディーの作品集を見てもエネルギーの集約度の高さは感じるが、色彩の異様さのみが際だってデザイン系の仲間が称賛するのが全く理解できませんでした。また、コルヴィジェのロンシャン教会にしてもなんとなく、形のシャープさは感じるが、イカの頭のような立面は不可解で、エッセイにいたっては全く抽象的で飛躍があり過ぎ、ほとんど理解できない状態でした。

以来、数学を通じての構造解析から構造設計の領域に入り、単なる力の流れ、モデル化、解析、部材設計、ディテール検討等のみでなく構成部材がどのような空間を創り出し、衣を着せた状態で空間、光、色彩がどのような総合効果を演出するかに次第に興味を抱くようになりました。その頃、友人の勧めもあり１ヶ月、南欧、中欧を中心に建築を見に出かけました。実務を経験してから８年目の春でした。

古代から近代建築まで、ガムシャラに見て歩きましたが、空間、光、色の扱いに強烈な印象を受け、建築のすばらしさを初めて体験しました。前述のガウディーのカサミラ、カサバトル、ゲル公園、サグラダファミリエはスペインの風土と歴史の中にごく自然にたたずみ、独創的空間を演出していました。ロンシャンも外部空間と内部空間の必然的なつながりがよく理解でき、心にくい光の扱い、色彩のバランスに驚嘆し、建築というより彫刻を見ているような錯覚におちいりました。その他、アルハンブラ宮殿の地下の蒸し風呂、サンピエトロの大聖堂直下の限りなく神の世界を摸索した擬似空間に現代建築以上の人間性と創造性を感じました。この旅を通じて建築は自らの目で見、空間体験することが最も大切であり、また、それぞれの作品には風土と歴史がからみあい、作者独自の独創的空間が創造されていることがわかりました。

それから15年になりますが、昨今、構造設計はコンピューター化により長足の進歩を遂げ、技術的にはかなりのことが可能になり、益々、建築家、構造家にとってデザインコンセプト、ポリシーを大切にすべき時期になってきました。ポンピドーセンター、上海香港銀行、中国銀行等は、メガストラクチャーが見事にデザインされ、高いレベルでデザインコンセプトが具現化された事例です。

さて、建築家と構造家のかかわるタイミングについてですが、最近は、あまり最初からかかわるより、建築家が自由に思いめぐらし、ある程度イメージができた段階から話し合った方が良いと思うようになりました。独創的なデザインのためには、既成概念にとらわれない方が良いと思いますし、技術的にはどのようにでも対応できるからです。

また、良きパートナーとは、ある時には各々のプロの立場で、またある時には相手の立場に立脚して議論し、融合できるところは融合させ、その繰り返しで徐々に漠然としたイメージを具現化していくことができる仲間だと考えます。そして数年おきにパートナーを組み互いに燃焼しつくし、その後、各々独自に充電し、また新たな作品に取り組むことができる間柄だと思います。建築家と構造家にとって、限りない前進を前提とした信頼関係が最も大切です。

ここ数年、建築雑誌を見たり、出張する度に、建物の質が平均的に高くなってきているように思います。特に、東京、横浜、大阪、札幌、福岡で、デザイン的に洗練された建物が多くなってきました。この傾向は、企業の金余り現象、土地の高騰等にもよると思いますが、当地、名古屋においては大都市にもかかわらずまだまだの感が拭えません。これは当地域のクライアントの価値感、経済基盤等にも起因していると思います。

昨年の「デザイン博」、「デザインフォーラム」を契機に、今後当地域の都市、建築デザインが益々良くなっていくことを期待しています。また、そうなるよう、われわれＪＳＣＡのメンバーも頑張っていくつもりです。

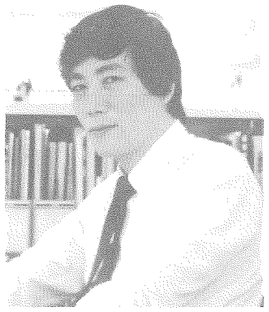
最近、特に「若い人たちの力を自由に伸ばせる環境づくり」に努めています。ただ、創造的活動は一朝一夕にできるものではなく、作品の質を高めるための試行錯誤を日夜繰返さざるをえません。真に建築を愛し、建築を通じて創造活動をしていこうとしている若い人たちは、安易な道でなく、ぜひ、王道を極めていただきたいと思います。

現実的にはここ数年、倍々ゲームのごとく仕事量が増え、創造活動とは程遠い処理作業に徹さざるをえないのは何とも寂しい限りです。しかし、こういう時こそ若い人たちが力を発揮できる時かもしれませんね。

(㈳日本建築構造技術者協会会員)

去る１月10日に開催された名古屋市主催の都市景観シンポジウムにおいて、「デザインの見える街角」をテーマにパネルディスカッションが行われた。パネリストの１人として、都市景観賞受賞者の立場で参加した南石周作氏の発言は、建築家としての実体験に根ざしており、傾聴に値する興味深いものであった。

都市景観づくりはフュージョン感覚で



南石　周作
㈱日建設計名古屋事務所設計部長

●名古屋の急速な変貌

私は、出身は岡山ですが、名古屋に住んで――その間２年ほどサンフランシスコへ行きましたが――かれこれ18年になります。

私が日建設計の名古屋事務所に赴任した18年前に比べると、この街に大きな変化があったことは、誰もが認めることだろうと思います。

名古屋は「白い街」といわれたり、タモリにたたかれて「ダサい」とか「カッコ悪い」というイメージを持たれたりしました。しかし、考えてみると、名古屋というのは、お城でもっていた時代から儒教の精神をベースに、実質的な質素倹約というような風土が、いい悪いではなく、かなり大事な部分として基本的に備わっているまちですし、また街の基本的な骨組みもできていますから、そう卑下することもないだろうと思っていました。ですから、ここ数年の急速な変貌は、名古屋の一市民としての私にとっても、その変貌の一部分を担っている建築家としての私にとっても、大変嬉しいことです。私自身のこの短い名古屋住まいの体験のなかで、大きな変化に遭遇できたというのは、建築家としてラッキーだったと思います。

●時代の流れは個性を求める

いま日常の仕事を通して感じられるのは、「感性」や「個性・アイデンティティ」を求める大きな時代の流れです。民間企業のみならず、官庁も含めて、ものをつくるからにはアイデンティティを持たなくては、という時代になってきました。そのピークがデザイン博だったと思います。いろいろな企業にききましても、企業イメージをどうするか、という問題に直面しています。昔のように大企業だけではなく、中・小企業も、それなりにアイデンティティが主張できるすごい時代に入ってきているのです。われわれは、その芽を見逃してはならない、それを育てる立場に立たなければならないと思います。ただ、デザイン博では、デザインということが氾濫していました。これからは、引き算のデザインといいますか、「デザインをデザインする」時代に入るのではないかと思います。

シンポジウム風景

●都市の原点は多様性

私は建築設計、つまり建築のデザインの側の人間です。街の中で建築をつくることは、即、都市空間をつくることになります。したがって、都市をどう捉えているかが問題になってきます。

都市は、多様性が原点であり、自分が多様性の一員であるからには、他人も認めなければなりません。ですから、そこには、『お互い様』という互恵平等の精神が芽生えてきます。都市は、自分と違うものを認めるルール、あるいはマナーかセンスのようなものがあって成り立っているのです。自分と違うヤツがいるからおもしろいんだ、それでみんな集まるんだ、という基本的な認識を私としては持ちたいと思います。

●景観はできていくもの

都市景観ということに関連させていいますと、都市は一夜にしてできるわけではありません。名古屋にしても、戦前戦後、ずっと歴史があります。その歴史の１ページ、あるいは一断面が景観だと思うのです。私どもは、久屋のモニュメントやビルをつくったりしますから、１ページの命が多少長いかもしれませんが、基本的には、都市というのは徐々に徐々に積層してできていくものです。ですから、「オレがこの景観をつくった」ということはいえない、いうべきではないと思っています。

都市が変化していく様子は、油絵の点描画に似ています。様々な色の点を次々と塗っていくことで、一つのまとまった絵ができていきます。そうやって点々と描いている人が、市民であったり、建築設計者であったり、名古屋市であったりするわけで、基本的なデッサンは確かに問われますが、切れ目なく塗り重ねられていく、その瞬間が景観なのです。できていく景観が大半で、つくっていく景観というのはごく一部だという気がします。

●都市への気配りの大切さ

ただ、それは責任放棄ということではなく、つくるためには、こうありたいということがあります。私の建築家としての立場でいえば、景観というのは空間からできていくということです。空間というのは、生活する空間という意味なので、生活からといってもいいのですが。今日のテーマは「デザインの見える街角」ですが、景観という観点からは、街角から通りの賑わいになってまちなみになっていく、という一つのつながりがあります。自分の屋敷だけではなく、通りとか都市への気配り――商店のおばさんが、朝、水を撒いて掃除するということだけでもいいですし、花をちょっと植える、ということもあります――が景観を決めるのです。美しいシルエットとか美しい色、これも当然あるのでしょうが、景観ということからも、そうした都市への気配りをまずきちっと捉えておかなければならないと思います。サンフランシスコに住んでいたときのことですが、クリスマスのころに一人でいましたので、寒くて淋しいとき、よく街を歩いていました。すると、ちょっとした窓にクリスマスツリーが外から見えるように通りへむいても飾ってあるんですね。「あっ、これだ。」と思って感動したのを覚えています。

●景観づくりはフュージョンだ

音楽の世界で、フュージョンということばがあります。ジャズでよく使いますが、いろいろな種類の音楽をブレンドするというような意味です。もう少し私流にいうと、かけ合いです。どうも、都市景観というのはフュージョンではないかという気がします。ある街のメロディーがある、それが単音の旋律一辺倒ではおもしろくありません。そこへコーンと、バランスを保ってはいるが異質な個性がぶつかってきてもいいし、あるときは、パッと合わせた音をやってもいい。とにかく、景観づくりというのは、何かフュージョンする試みでつくることだろうと思います。

名古屋全体、あっちこっちでフュージョンしちゃおうよと、建築家も市民もみんな一緒にやろうよと、デザイン博の残したこういう気分が、日常の名古屋の街を楽しみながら都市景観ということを少し身近に置き直していくことになるのではないかという気がしています。

新刊案内

日本建築古典叢書　５巻
近世建築書－座敷雛形
小葉田　淳監修
Ａ４版　P.762 ¥49,440
（本体48,000）大龍堂書店

日本の伝統的な建築様式“和風”を中世から近世まで紹介。シリーズ10巻のうちの１巻。今後年２冊刊行予定。

ＳＤライブラリー①
アールデコの摩天楼
小林克弘
Ａ５版　P.270 ¥3,502
（本体3,400 ）鹿島出版会

史的展開、造形理念、構成原理を明らかにするのが目的。アメリカの20年代がリヴァイヴァルで現代でも再評価される。

速度空間
－日本のインテリアデザインの諸相－
Ａ４版　P.207 ¥10,500
（本体10,194）六耀社

デザインの価値は、ものから意識へ移行せねばならない。デザインに接する者が真に求める意識は自由と解放……。３13の作品収録。

エーゲ海・キクラデスの光と影
畑　聰一
Ａ４版　P.247 ¥4,800
（本体4,660 ）建築資料研究社

キクラデスは小アジアに接するヨーロッパの辺境であるが、それ自体ひとつのコスモロジーをもって存在している。

建築のファシリティマネジメント
建築ＦＭ研究会
Ａ５版　P.178 ¥3,090
（本体3,000 ）鹿島出版会

ＦＭの狙いは単に施設管理だけでなく、トップの意志決定のための提案書である。将来は広く（不動産はもちろん）ＦＭが論じられ利用されるであろう。

（丸善調べ）

JIA北海道支部、北海道知事に要望書を提出

ＪＩＡ北海道支部では、平成元年11月１日に、北海道で開発普及が進められている「北方型住宅」の推進事業の全道展開、公開設計競技の実施、などを求める要望書を、㈳北海道建築士会、㈳北海道建築士事務所協会と連名で、北海道知事に提出した。

要　望　書

北海道においては、21世紀の北国にふさわしい豊かでゆとりある住宅として「北方型住宅」の開発普及など、多様化、高度化する道民の「住まいづくり」の推進をはじめ、本道における建築文化の発展に取り組まれておりますことは、私ども建築設計界にとりましては大きな励みとなり、深く感謝している次第であります。

特に、近年の社会経済情勢の変化に伴う屋外広告物の増加傾向や掲出の現状、地域の特性を生かしたまちづくりの状況等に鑑み、北海道屋外広告物条例の改正等に取り組まれておりますことは、景観行政に新たな展開がなされるものと、大きな期待を抱いているところであります。

私どもといたしましては、これら北海道の施策に積極的に参加、協力し、良質な建築創造活動を通じ、道民生活の向上のために努力する所存でありますので、今後とも、より高度な地域文化の発展に向けた施策の展開について、特段のご高配を賜りますよう要望申し上げます。

記

１．北方型住宅推進事業の全道展開について

北方型住宅の全道展開については、道立の「北方型住宅開発普及センター」（仮称）の設置や認定制度の創設などと併せて、本道における建築技術の普及促進に努めている北海道建築指導センターの機能強化が必要であります。

また、全道市町村や関係団体との連携により、各々の地域に根ざした良質な住宅建築を促進するため、道民参加による「北方型住宅モデル50選」などの普及方策を講ずる必要がありますので、関連施策の展開についてご配慮をお願いいたします。

２．公開設計競技の実施

建築設計団体といたしましては、これまでも地域における良質な建築創作活動を通じ、地域文化の発展に努力しており、今後とも私どもの使命として個性豊かな地域づくりに前向きに取り組む所存でございますので、地域に根ざした文化性の高い公共建築の公開設計競技の実施についてご配慮をお願いいたします。

３．建築関係業界の振興について

近年の建築技術の高度化に伴う、技術者の不足や技術報酬の上昇などの課題について、現在、建設業協会や商工会などと連携をとりながら調査検討をすすめておりますが、私どものみで解決できるものではありませんので、これらの対応についてご指導、ご協力をお願いいたします。

４．道産建築材料の開発利用の促進について

道産建築材料の活用や道内業者の活性化を図るため、間伐材、から松材等の高度利用をふくめた木材加工及び建築工法の開発研究が、民間との共同研究などによりすめられておりますが、寒地住宅都市研究所をはじめ試験研究機関のより一層の機能充実などによる開発研究の強化とともに、利用拡大を助長する施策の展開についてご配慮をお願いいたします。

平成元年11月１日

北海道知事
横　路　孝　弘　　様

㈳　北海道建築士会
会　長　佐藤　隆次
㈳　北海道建築士事務所協会
会　長　齋藤　久名
㈳　新日本建築家協会北海道支部
支部長　上遠野　徹

新／入／会／員／紹／介

昨年８月のＪＩＡ東海支部愛知部会の名簿発刊後、新たに愛知部会員となられた２名の方々を紹介します。

寺　倉　　勇
TERAKURA　ISAMU

【出生】　昭和14年５月18日　　【出生地】　岐阜県
【住所】　〒480-03　春日井市坂下町５丁目1215の356　　TEL0568-88-4566
【勤務先】　大建設計㈱　〒461 名古屋市東区泉2-29-19　　052-931-9788
【所属団体】　日本建築学会、愛知建築士会
【出身校】　名城大学第二理工学部建築分科　昭和38年卒
【略歴】　昭和34年４月～35年12月　西山建築事務所
昭和36年１月～37年７月　山内建築事務所
昭和37年９月　大建設計入社
昭和42年４月　取締役　現在に至る。
【業歴】　オテルド・マロニエ下呂温泉、坂下町総合体育館、春日井市立西岩成台小学校、東洋病院、ホテル山海館、春日井市立養護老人ホーム
【趣味】　お寺巡り、ゴルフ

私は、先祖をたどるとお寺の住職、苗字も寺倉、職業は建築、というわけで、お寺巡りは私にピッタリの趣味ではないかと思います。いままでにも、近くのお寺をかなり見て歩きましたが、今年からは、もっと本格的に全国各地を巡りたいと思っています。１月には、さっそく谷汲山華厳寺に夫婦で行ってきました。これからも、夫婦で月１回、出かけたいですね。（談）

藤　本　克　己
FUJIMOTO　KATSUMI

【出生】　昭和26年３月23日　　【出生地】　京都市
【住所】　〒483 愛知県江南市大字五明字青木添 56-7　ナビタウン江南Ｄ-208
TEL0587-56-0958
【勤務先】　㈱佐藤総合計画名古屋支所　〒460 名古屋市中区栄2-10-19
名古屋商工会議所ビル　TEL052-201-0261
【所属団体】　愛知建築士会
【出身校】　京都市立伏見工業高校建築科　昭和44年卒
【略歴】　昭和44年４月～平成元年７月　㈱東畑建築事務所
平成元年８月　㈱佐藤総合計画入社　現在に至る
【業歴】　三重県立一志病院、三重県久居庁舎、三重県議場棟、松阪伊勢信用金庫本店
【趣味】　ゴルフ、釣り
【入会に際して一言】　昨年夏、建築家職能原則５項目がまとめられ、今後は現実への対応と具体的な活動が期待されます。複雑化し混沌とした社会情況、押し寄せる変革の波の中、グローバルな視野に立った将来的展望のもとで会の運営が行われる一方、会員個々の日常での小さな努力の積み重ねが大切ではなかろうかと考えます。

窓はインテリアのかなめ

藤田淑子＝名古屋三越・インテリアコンサルタント

名古屋三越百貨店の家具売場の一角に、一昨年から「生活編集室」という名の小部屋が設けられた。カーテンなどのインテリアから水周り、住宅のプランニングの相談まで、衣・食足りて住環境に目がむいてきた社会のニーズに、幅広く応えようという試みだ。

藤田淑子さんは、ここでベテランのコンサルタントとして、腕をふるっている。キビキビした身のこなしと、美しいことば使いが印象的。名古屋で働く女性一級建築士の草分け的存在である。

札幌で生まれ、小学校2年生のときに栃木県に引っ越した。東京が第1回の大空襲を受けた後だった。5年生のころ、選ばれて軍需工場の機械製図をする勉強をさせられた。「いまでいう図学の端くれのようなことね。初めてやったのが、ねじの製図だったんです。自分がかいた平面図が立体的なものとなって出てくる。なんておもしろいんだろう、こんな仕事があるといいなあ、と思ったのが、そもそもこの道に入ったきっかけなんです。」

藤田さんの育った家庭は、女の子でも何か自分の仕事をするものを見つけるべし、という考え方で、そのためには進学もあたり前だった。そこで、ごく自然に母親の母校でもある日本女子大学に入学。家政学部生活芸術学科で住居学を専攻した。卒業後、2級建築士の資格を取るためには、2年間勤める必要があった。「それで、谷口吉郎先生のお弟子さんたちがつくった事務所に就職したんです。いいものを少数つくっていこうという姿勢の事務所で、1年に多くて3つくらい。家具まで全部トータルにつくっていました。スタッフも少なく、学究的なタイプの人が多かったから、私は現場にも出させてもらったし、原寸図もかかせてもらいました。」ここで、一つのものをつくり上げる過程の全般に渡って学ぶことができたのは大きかった。

この間に結婚。物理学者であるご主人のプリンストン大学留学に伴い、'60年から2年ほどアメリカへ。帰国後、ご主人が名古屋大学のプラズマ研究所に勤務することになったため名古屋へ来た。子どもが生まれたのも、1級建築士を取得したのもこの頃だ。

さて、仕事がしたいが、当時のこと、女性の1級建築士が働く場などなかなかない。やっと、オリエンタル中村の顧問をしていた名古屋のインテリア界の先駆者、松本政雄氏の紹介で、同デパートに就職、インテリアの仕事をすることになった。

'71年、ご主人の関係で、今度は一家揃ってミュンヘンへ。せっかくの機会だからと、仕事も一端やめて行った。2年後に帰国。同じ職場の、新設されたインポート家具のコーナーに請われて復帰、以来、現在まで勤めている。「いろいろな部署に就きましたよ。住宅や店舗、オフィスの設計、リフォーム、プランニングの手伝い……来るものは何でもやりました。」

その藤田さんが、プランニングの上でもっとも大切にしているのは「窓」だ。窓の表情でインテリアは随分変わる。たとえばキッチンの窓。みな横長にするけれど、縦長にしたらどうだろう。機能、家具の配置、自然の光の入り方、内から眺める外の景色、また外から見たときの印象……すべて変わってくるはずだ。窓からは、その家の生活がのぞく。外国を回るときにも、なるべく窓の写真を撮るようにしているそうだ。

「88才の主人の母が隣に住んでいるんです。母を見ていると、高齢化社会の住まいづくりの難しさを感じます。ドアの取っ手ひとつ、蛇口のハンドルひとつにしろ、細かいところにも、ちょっとした配慮が必要なんですね。」これからの日本社会が避けて通れない問題として、高齢者のための住宅づくりも考えて行きたいという。

短大や専門学校で、若い女性たちにインテリアデザインを教えている。娘さんも建築の道を歩み始めた。「大先輩」として、多くの建築を志す女性たちの憧れや目標となってきた藤田さん、現在進行形で活躍の真最中である。　（あ）

「ＪＩＡ四国ＮＥＷＳ　1989年７月号」より転載

私の生き方

蝦蟇（がま）に教えをうけ、野の花に理想の建築をみる

村松正恒

私は、大洲中学で中江藤樹の学を叩きこまれた者の一人。藤樹は、秀吉の死後3年の生まれ。13才で大洲の地をふみ、27才まで留まる。その最後の2年間を、私の郷里である新谷藩に仕え、陽明学を研鑽。母に孝養を尽くしたい一心で生まれ里である近江小川村に帰り、塾を開いて学を講じ近江聖人と崇敬され、41才で没。藤樹学の骨子は、致良知、知行合一。

人はこの世に生をうけ、いつかは死す。その間に憂いの絶えることはない。人間は体内にあるときすでに、それぞれの定め、性をそなえている。逆らうことはできない。天命であり運命である。生まれながらに、教育され、経験しなくても、知る、行なう能力、すなわち知能と徳を心と身体に持つ、これが人間の本性。この良知良能を磨き、物の道理をわきまえ、天から命じられた務めを果たさねばならない。朱に交われば赤くなる、というが、朱が沈めば元の澄んだ水になる。赤く染るも一時の迷い、学問に励めば迷うこともない。中庸の道を踏みはずすこともない。相手を敬い軽んぜず、あたたかく優しく接する。いいかえれば、徳を身につけ人格そなえること。

心を外に向けるからいけないのだ。人間は平等には生まれていない。しかし、等しいことがひとつある。生まれながらに純真な心を持つ、このことを反省し、心を内に向けよ。そうすれば、人を羨むこともない、分際に応じて満足する、これを知足と言う。傲慢にならず、名声、慾に目もくれず、怠けない。そのときに人は憂いを去り心やすらかにして幸福感にひたる。さらに、己を幸せと思ったら、他人を幸せにする寛大な心と親切な行為、易しいようでむつかしいことだが、このとき人は無我の境地、良知良能を体得し、美しく静かな魂の持主となる。『良し悪しの色に心をとどめねば、柳は緑、花は紅』人が自分を認めよう認めまいと少しも動揺せず、不満を覚えることもない。

空間、時間を超越して至善の道を歩むことができる。幸福は人格である、といわれる所以。心が定まって変わることなき正しい心、これを恒心、人にたとえれば松村正恒。恒心あれど恒産なきが玉に瑕（きず）。

佐藤一斉の言、少にして学べば則ち壮にして為すことあり、壮にして学べば則ち老いて衰えず、老いて学べば則ち死して朽ちず、かくありたいと念ずる日々。

学のない人々に学問の真髄を説いて倦まなかった藤樹は、知行合一、実践躬行に範を示したが、塾にまぎれこみ盗聴せし盗賊の親分、急ぎ帰り手下に訓示。まず行動に先立ち、蔵の中に金目のもの有るや無きや誤たぬ、これを知という、率先して押入る、これを勇、元どおり片づけて最後に出る、これを義、盗品を平等に分配する、これを仁。盗人にも三分の理、ところが、どうも落ちつかぬ、藤樹の門を叩く。

藤樹曰く、お前は形ある物に目がくらんでいる。実を取ることばかり考える。虚を埋めることを知らぬ。言に物あり、行に格あり。お前の行為は間違っている。形のない物、目に見えないものの価値に目ざめよ。お前は闇でも目が見えるようだが、闇の世界から足を洗え。日の当る場所へ出ろ。人目をはばかることばかり考えないで、目立つような存在になれ。無から有を生ず、お前の職業を虚業家という。世にいう建築家と同列だ。人の物を盗んで、お茶をにごす、三分どころか五分の理屈をこねる。あんな真似だけは止せ。これまでの経験を生かし、知恵をしぼれ。失敗を恐れるな。稚拙と言われようと人の魂の深奥にせまれ。

中学生の頃、蛙の解剖あり、人なみに青蛙を用意していたが、出がけに蝦蟇と目が合う、縄でしばる。蛇に身体半分のみこまれても諦めない、麻酔の断末魔に涙ながらに蝦蟇が言う。君のおかげで汽車にも乗れた、商店街も見物した、虚栄に身をやつす人間のあわれさも。君に会わなかったら、ワシは一生を藪の中で終ったであろう、恨むどころか感謝している。最後に一言きいてくれ、もう駄目だ、などと弱音を吐くな、我慢せよ、粘れ、頑張れ。

蝦蟇の言うこと、間違いあるまい、遺言を守ろう、と固く心に誓ったのが禍のもと、蝦蟇が息を引き取った瞬間、蝦蟇の精が私に乗り移る。歩いても、のそり、のそりと進歩が遅い。長い物には巻かれる、呑みこまれる、無口で、目立つ存在ではない、蔭にうずくまって世間をにらんでいる。人間は平等でない、と悟ったつもりでも、山本忠司先生とは開きが大きすぎる。山本先生は総身に知恵が廻るのに、私は知恵の泉も枯れはてた。無理に絞れば油汗、万事につけ三段跳びの山本先生に比べて私は、跳ぶどころか引きさがるばかり。冬近づけば穴ごもり。せめて横這うカニになりたし。

18才の晩秋であった。そろそろ冬眠の支度をと思ったとき、月にかかる叢雲（むら）晴れるが如く豁然と悟る。学歴とか肩書などに目もくれず、一人の人間として世に

処していこう、と。

その手始めに名も無き学校にもぐりこむ。竹内芳太郎、蔵田周忠先生に出会い、両先生を通じて今和次郎先生の知遇を得る。私の一生、生き方は、それで決まる。後悔みじんもなし。今先生に初めてお目にかかれたのは、全国の民家の模型を作る小さい集まりで。三先生とも民家の採集に熱心であったが、東北地方は貧窮のどん底にあえいでいた頃でもあった。竹内先生は農村住宅改善のための調査に日夜奔走。

学問に卒業証書は無用、生涯教育を口にする者には、この覚悟がいる。教師の実力は、私が評価する。習う私は、0点とるか、さもなくば100点、中途半端は時間の浪費。何を学ぶか、何に熱中するか、児童虐待防止法が制定される前であり、乳児死亡率の高さに私の小さい胸がいたむ。いかにして彼らを幸せにしてやれるか、その根本に溯（さかのぼ）ることが、私の命題であった。

ある日、蔵田先生を訪ねる。そんなに困っているか、と財布を覗かれたが空と知り、翻訳できるかと国際建築の小山正和さんに紹介される。翻訳の手伝いが物心両面で、いかほど功徳ありしかはかり知れない。就職のことは一切心配しなかった。貧しくとも気位たかく、道は切り開くもの、道は譲るもの、との肚はできている。当時、最もモダーンな建築家であり、ダンディな生活信条を守っておられた土浦亀城先生が事務所を開設、蔵田先生の言われるままに入所、月給きまらぬドラフトマン、サンドイッチマンより悲しからずと。建築家の一人立ちは40才、アーキテクト土浦で、やっと世界に認められる、と畏れながら事務所のドアーに、小さい文字板を貼られる。

今日にいたるまで忘れることのできない小さい事件、私にとっては大いなる衝撃。ある社長の木造住宅の現場で、腕のある深川の棟梁には縁遠い洋風、青二才の図面に散々てこずっていたところへ、仕口が狂わんように、と口を滑らしたのが運のつき、ヤイ若造、このワシを何と心得とる、畏れ多くも貴族院は天皇の玉座、それを仕上げたのは、このオレだ、見そこなうな、と啖呵きる。これだけの誇りと自信を持ってこそ尊敬に値する職人といえる。心と技に秀でた職人衆を育ててきたのは、人格すぐれ見識たかき大旦那たちであった。巷にあふれる小旦那の及ぶところではない。

招かれざる客が入ってきて、骨相を見てやろう、見料の心配するな、と頭をなでてから言う。お前は大物になれる器ではない、大きい仕事のリーダーにはなれない。だたし救いはある。パトロンが次から次と現れて困ることは、まずない。帰りぎわに、お前、この仕事続ける気か、と気の毒そうに尋ねる。まあ、今のところは、止めとけ、今なら遅くはない、出直せ、悪いこと言わぬから、と親切に言い残す。建築家がお前に適した職業とは言わなかった。あの日から今日まで、挫折のたびに、骨相見が教えてくれた職業に変わっておけば良かった、と幾たび思い悩みしことか。

人は急いで決断を下し、ゆっくり後悔する。その通りだと感心したり、「苦しみは変わらない、変わるのは希望だけだ」と言ったアンドレ・マルローの顔を思い起こす。それでも気の静まらぬときは、老荘に親しむ。人間は、自分で定めた線までしか昇れない、待機の姿勢、この心構えで生きてきたが、気がつけば退機の繰返し。

手を取って教えていただいた土浦先生に、お前はバランス感覚が鈍い、と注意されたとおり、われながら建築家には不向きの人間、そのくせ人の真似は嫌い、下手でも良い、自分の頭で考える。これで良いと思ったときから人は老い始めるというが、始めが終わりであった。始末におえぬ。今じゃ捨て台詞（ぜりふ）、喜びを感じ、滑稽を笑い、世界を笑うと共に、自分自身を笑う術を身につけよう、と。

建築家に不向きな自分に愛想がつきると、世にいう建築家という人種も好まない。大勢集まって、家・家というと烏合の衆と間違えられる、と旧家協会大会で臆せず言う。烏合の衆は周が正解、山の中に集まった烏は円陣を張る。黙ったまま時を過ごす。一羽がカーと口を切る、寡、衆寡敵せずの意味らしい。長い間をおいて、カー、過、過ぎたるは及ばざるが如し。また沈黙。カー、可もなし不可もなし、カーカー可決成立。カー協会誕生の一幕。

世に出て5年もたつと、建築事務所の存在理由、というより自分の一生を託す価値ありや否やと憂悶。新京に在りて、胸の内うちあけるたびに、蔵田先生からは早まるな思いとどまれ、と忠告されたが素直になれなかった。理由は、ほかにもある。満州での日本人の傲岸不遜な態度に絶望し、これに対し、日本人など眼中にない満州国大人の風格に圧倒されたからである。

日本に帰ると間もなく戦争、農地開発営団が発足、建築課長に就任された竹内芳太郎先生の元へ。新潟に本居をかまえて、秋田から福井まで、長野を含む雪国の農村を4年間、歩きまわったことは、私にとって得難い体験であった。迷惑をもかえりみず農家に泊まる、暮らしぶり、人情つぶさに会得。秋の夕暮、音をたてて枯葉が散る、見る見る裸になる。雪の降りつもる夜、海鳴の音が佗しい。大地主、本家、分家、小作の間柄、古いしきたり、社会秩序が目にみえて崩れていく。良くも悪くも、美しい日本は、あの頃に、消えてなくなる兆しを、ほのめかした。

行く先々に、昔のままの家が、町並みが生きていた。雨が多い、湿った空気、積もる雪、大地に根を深くおろした家と集落、落ちついた暗さ、無造作な野暮な感じは否めない。そのような情景の中で、角館町の商家の念のいれよう、武家屋敷の格式には胸うたれる。70年前、夏の盛りであった。明けはなした奥深い家の向こうは庭、座敷に端座し書見に余念なき白髪の老人の姿が、今も瞼に浮かぶ。しかし、これは記憶のひとこまで、関心の

的はこれではない。農繁期託児所の1日の生活を確かめること。生活用水でもある小川のほとり、歯磨きの練習が始まる。男の子、一人はなれる、足の裏と指の股を無心に磨く、垢をおとしているらしい。呼び戻されて廻りを見れば友は揃って歯を磨く、ああ、そうか、とそのままロへ。

このような貧しい生活に、できる限り手をさしのべたい、と物静かに語り実践している老医の家のこと。医院に違いないが、村の人が座って、たむろしている場所が待合室。診察室、薬局らしき所は見あたらぬ。畳の上に、医師が座り患者が横になる、薬はトンブク一つつみ、カルテなし。見わたせば、柱は貫穴だらけ、壁は中塗、すすけた天井、夏草しげる庭。これでいて、不潔な無精な感じを与えない。なぜか、老医の人格が品性が、家の空気を暖めているからだと思う。形でもない、飾りでもない、シンボルではない、スピリットである。

今先生の偉さの秘密も、ここにある。真実の学者であり、徳義あつき方である。片々たる知識にとらわれず、人間いや人類の生活は、政治、経済、社会、歴史、心理、民俗、風俗、芸能、その他あらゆる学の活力あふれる総合に基づくものと考えられた。社会党三多摩支部長を勤められた、あの壮士を生んだ多摩である。ひとたび壇上に立たれるや、音吐朗々、千万人といえども我ゆかんの気概にあふれていた。この反面、短冊にものされた文字、愛は最高のレクリエーション、心やさしく気くばり厚き先哲であった。まさに人生は出会いに始まって、さよならに終る。生涯忘れ得ぬ思いを、人の心に刻める人、真の偉人である。

私の卒業設計は、子どもの家。その内容は乳児、幼児の託児所、共稼ぎ家庭の学童を放課後預かる。母の病気、入獄（それも不思議でない時代であった）に際しては、夜間も長期にわたっても預かる。家庭の延長のような、気やすい子どもたちの家。

児童問題、と当時はいった。教育、心理、遺伝、衛生などに関する出版物、雑誌類に目を通し、研究所を訪ね、施設を腰すえて見学、あらゆる機会を利用した。寝食を忘れた、といって恥じないつもり。川添登氏と知り合えたのもこの縁（えにし）あってのこと。

ここらで少し建築の話を。モニュメントを創ることには、才能もなし関心もない。ひたすら念じたことは、こうである。

人の通ること稀な山奥の日陰に、つつましく咲く名も知れぬ一輪の花。通りかかった旅の人、もよおした小水に、ふと見おろせば小さき花、はなはだ失礼と、つくづく眺めれば、清純な香り素朴な色、心にしみて立ち去りがたい、そんな建築を造りたい。ところが、私の小さいこの願いが叶えられた、半世紀たってから。聞きつたえ、涙ながして喜んでくれたのが、親愛なる蝦蟇である。そして言う、よく今日まで我慢した、だが、決して自慢はするな、宣伝するなど下衆（げす）の仕業、真物（ほんしもの）ならば口づてに知れわたる、蝦蟇の油が何よりの証拠。

有名になった盈進学園高校、理事の細井栄氏が学校建設にあたり、日本で名の聞こえた学校を見て廻られた。目をみはるような才ばしった物、見せ場に事かかない、これでもか、これでもかと押しつけがましい建築。金をかけ贅をつくした学校。どれも胸に訴えるものがない。思いあまって訪ねたのが四国の果て、日土小。

ああ、これが土曜と日曜だけの楽しい学校と勘ちがいされた、内田祥哉先生ご推奨の学校か。やっと、学校らしい学校に辿り着いた。なんの変哲もない、てらいもなければ見せ場もない。冬眠から目ざめた蝦蟇のように、ぼやけて、おまけに泥くさい、簡素きわまる。だが待てよ、見すてるには忍びない。自然、わざとらしさがない、不均斉。内に入ってみよう、ペイント塗では木肌も木目も艶消しだ、だが、教室にただよう気配が心にしみる、静寂、枯高の醸し出す、えにいわれぬ味がある。ほのぼのと伝わる気品がある。自分が探し求めていた学校に、やっと巡り遭えた、細井栄先生の述懐である。

設計者は、と聞けば、名も無く貧しく、蝦蟇の生まれ変わりとか、美しくないわけだ。でも、やせ我慢の筋金いり、粥（かゆ）をすすっても節（せつ）を曲げぬ。もっとも、筋金とはいっても、細い針金、言われて気づけば僕も細井。惜しいネ、自由自在に曲がるがゆえに針金は重宝がられる、筋をとおすにもほどがある。

森毅教授が言われた。思い出に残る学校、それは、建築家が腕によりかけ自慢の種にしているものではない。校庭に大木がそびえていた、入ることを禁じられていた密室があった、それだけだ、私も同感、幸せに思う。

学校の鐘の音を子守歌のかわりに育つ。私の生家は学校と地つづき。学校の敷地は一万石大名の屋敷跡、南が開いて三方が山、庭の池に面して古い御殿も残っている。校庭には、樹齢 500年の大木、残った樅の木が亭々と立つ。ここで難問、万一の台風に大木がかたむけば、校舎か私の生家は見る影もない。村議一決、第一段として、大木の半分を伐り倒そう。

高さ50m、根本の直径3mの最後の姿を見とどけようと村民環視のなか、人々の思いを断ち切る壮絶な瞬間であった。

日土小の校庭にも、銀杏の巨木あり、樅の木とは違って格好の日蔭を作る。実は売られてPTAを潤す。学校を建てるとき、私のただひとつの願いを聞いて欲しい、と校長、廊下の端で良い、小部屋を。非行に走った子どもがあったとする、罰する前に膝つき合わして語りたい。あるいはまた、小さい胸の悩みに耳をかたむけ慰めてやりたい。退職後も、車にひき殺された犬猫の死骸を集めて廻り、埋めて墓を作る心やさしい校長先生。青年教師の頃、子どもをかばい命を救ってやった。そのときの後遺症の発作に耐え抜かれた一生であった。

私の学んだ学校にも、禁じられた室あり、校舎の中央、ここだけ突出して白色塗、堂々たる玄関ポーチの二階の室がそ

れ。当時の棟梁が、真似とはいえ渾心の傑作、酔えば口癖、ワシが死んだら灰にして屋根の上から撒いてくれ、と言い続け肺を病む。

30年を経過した日土小で感じたこと。もともと山間で日射しは弱い。教室にただよう気配が、しっとりと落ちついて、あたたかい深味を加えていることに。堰き止められた川の面を、小魚のはねる音が無言を破る。雨樋の水は高い所から川にまっすぐ。落口に巻きつけた棕梠のせいで、春雨には、シュロシュロと、豪雨ともなればシュラシュツシュツ。

密柑の花の咲く頃は、五月の薫風に乗って清純な香りが教室に漂う。秋には山に、密柑と柿の朱が映える。冬ふかまれば沈んだ落ち葉で、澄みきった川の底が絵に変わる。すべてが天のなせる業。

なかでも御満悦は宿直の先生、川に突き出したテラスから糸をたれる。釣りあげた魚を焼く。そのくりかえし。ゆかしき人魚の交じわり。蛍の乱舞する夏の宵、テラスに花散る桜の古木も今はない。思えば古い話。

オープンスクールが主流らしい。管理社会と技術優先の落とし子に思えてならぬ。伸ばしてやるべきは、個性ではない、創造力である。自分で工夫し、起きあがる力を養ってやること。教師が自分の持つ能力を思う存分に発揮できる場を造ってあげる、これが建築家にできる仕事、ただそれだけの話。

生涯教育を事あたらしく叫ぶ。空ぞらしい。私には50年前の仕事であった。新谷中学校で狩江小学校で、山奥の学校で、すべて実験済み。何事も、箱だけ造っても始まらぬ。とかく浮世は箱師が多すぎる。籠抜けのほうが、いかほど罪が浅いやら。

文部省は頼りない、問部省に改名せよと私が言う。木造校舎と騒ぐほどのこともない。この場合も、肝心なのは、形ではない、心だ。

私にとって木造の鑑は安芸の宮島。変幻自在、天衣無縫、人間の小賢しい遊びの跡もない。四季おりおりの祭には、神と人とが心をひとつに宙に舞う。無数の燈火が波間に揺れる。火の消えた後の淋しさも、ここにはない。

終わりに。常盤津の人間国宝、その横に名人、さらに玄人と並び演ずる。私ごとき素人にも、違いが歴然。にじみ出る芸の深み、厚みであろう。円朝が言っている。客が喜ぶからといって慢心してはいけない。自分の本心が、これで良い、と納得するまで芸を磨け。話すのは舌ではない、心で話せ、舌をなくせ。

歌舞伎噺方の人間国宝、田中伝左衛門氏は、蔭の正直。家族も他人も誰もいない所で稽古する。そのときに、気をゆるめるな、姿勢を崩すな、それができていないと、舞台に上がったとき、芸が乱れる。鼓は、手で打つものではない、心で打て。俳優も、名優ともなれば、身体をなくす。

私は常に思う。建築家たるもの、己を殺せ、目立ちたがる、愚の骨頂と心得よ。

（ＪＩＡ会員、四国支部）

情報コーナー

日米建築家の共通基準確立には 6～10年必要

＜ＡＩＡブリュワー前会長が見解＞

アメリカ建築家協会（ＡＩＡ）のベンジャミン・Ｅ・ブリュワー国際委員長（前会長）は、現在、ＪＩＡと共通の資格基準を確立するための協議を行っているが、確立までには「６年から10年が必要」との見解を述べた。職能に関する調印では、職能問題について①会員が両協会の委員会活動に参加し、技術・デザインに関する情報の開発と交換を強化する②学生・若手建築家・教師・実務家のための教育交換を行う③双方で展覧会を開催する④職能上の免許資格を相互に通用させるため、職能および専門的能力に関し実行可能な共通の基準を確立する――などを協議事項としていくことを決めていた。

協議中の資格基準は、④項目にあたるもので、調印の最大のポイントとなっていたもの。わが国には建築士法にもとづく建築士が一級建築士だけでも22万人おり、他方で、建築家に対する法制度も未だ確立されていないだけに、日米双方の共通の資格基準ともなると、そのスリ合わせは難航するものとみられるが、ＪＩＡにとっては職能上の免許資格を相互に通用させるための実行可能な共通基準は、あくまでも職能をめざすＪＩＡ所属の建築家を想定している。

設計委託の実態調査を実施

設計者の選定、報酬適正化に向け

公共建築設計は、発注者自らが手がけることが多かったが、今ではほとんどが外注されている。

委託の際の方法には、いろいろなやり方がある。複数の設計事務所による相見積り、一社から見積りを求める特命随契といった、金額で決めるものから、プロポーザル、コンペのように、アイデアで選ぶもの、さらには東京都が初めて導入して、最近では埼玉県、大宮市らが採用に踏み切った選定委員会方式など、多様な方式がある。

それぞれに一長一短があるが、いずれの方式で設計者を選ぶにせよ、その結果として受け取る業務報酬が適正のものかどうかが重要な要素の一つになっている。業務報酬料については告示1206号でマンデー方式を打ち出し、それまでの料率方式に代わるものとして定着を図っている建設省に、最近、各方面から「多くの場合、告示に比べて低い」との指摘が寄せられており、1206号の普及調査を実施することにした。同時に設計委託方式を調べることにしている。建築工事を多く発注している中央官庁と公団、47都道府県を対象に行う考えだ。公団らからはそれぞれ３件、都道府県からは20件ずつの公共建築物を抽出して、どんな方法により、設計者を選んでいるのかを調べることにしている。

また、都道府県には民間建築物についての調査も依頼する。事務所ビルを中心とする非住宅建築と、中高層集合形態の住宅建築を20件あまりずつ選んで実施する。

いずれについても、発注者と設計者双方に対して、どんな方法で設計者を選んだのか、問題点があるかどうか、業務報酬の水準などを詳しく調べることにしている。

建設省では22日にアンケート用紙を送付し、２月中に回収することにしており、結果をもとに、1206号の普及策、設計者選定方式のあり方などの検討を進めていくことにしている。

設計業務のあり方検討のための研究会

＜建設省＞

建設省は、新年度から建築設計・工事監理の業務のあり方、その報酬基準についての検討に着手する。学識経験者と関係方面による研究会を設けて進めていく見通しで、複雑化する建築物の設計業務の実態と、報酬を把握しながら、業務範囲、それに見合う設計料の確保などに向けた検討を重ねる考えだ。建設省では、建築設計業に関する将来像を示す、ビジョンの策定作業を進めている。おおまかなかたちで将来の姿を示し、クリアすべき課題と必要な施策を指摘することになるものとみられ、今年度末をメドにとりまとめることになっている。

このビジョンのあとの取り組みの第一歩となるのが、業務範囲と報酬の明確化。平成２年度予算に必要経費を要求し、要求が認められた。この行政部費を生かして検討作業を進めていく。建築物は大規模化もさることながら、複雑化する一方となっている。用途的に複合施設が多く出現し出し、求められる機能、設備も多様な分野に及んでいる。こうした建築設計を委託する建築主が、設計者に対してどこまでの業務を求めているのか、実際に設計者はどんな業務範囲で受託しているのか、そして、その結果としての報酬がどの程度のものであり、業務に対して適正な水準なのかがハッキリとしていない。

これは、設計図書をもとにして行われる工事監理にしても同じことがいえる。このため建設省は、建築設計と工事監理の業務にかかる内容と報酬について、実態をを把握したうえで、これからのあり方、適正な報酬水準などについて、検討を開始する。

報酬については、昭和54年に告示1206号を示して普及に努めているところだが、まだまだ徹底しているとはいえないため、この告示の一層の普及に向けての措置も講じていくものとみられる。

用途地域規則のあり方についての検討

＜建設省＞

建設省は、新年度から用途地域規制のあり方について、本格的な検討に入る。建築審議会が大都市の住宅・宅地の供給方策について年度明けに答申するのを待って、同審議会で審議してもらうのと並行して、14の府県市で組織する検討委員会において、実務的な研究を進めていくことにしており、法・制度面の改正が必要かどうか、必要ならどんな手だてを講じるべきかを探っていきたい考えだ。

建設省では昨年３月に、２つのテーマについて建築審議会に諮問している。その一つは、大都市圏において住宅・宅地を供給していく方策を、建築基準法の観点から検討していくものである。

用途規制は、住居地域、商業地域、工業地域など、区域に応じて建てられる建築物の用途を定めているが、これが経済・社会の変化に伴い、実態に合わない部分が出てきた。

また建築物内に保管・貯蔵される燃料、薬品といった類いのものも変わってきたこともあり、いまの用途規制のままでいいのかどうかを研究していく。

保全業務に関する初の共通仕様書発刊

建築保全センターは、建築物の保全業務に関する初めての共通仕様書を作成し、経済調査会から発刊した。

建築ストックが膨らむなかにあって、建設省では建築保全センターとともに「建築保全業務共通仕様書研究会」を設け、点検・保守と、この結果、講じるべき措置について検討を重ねてきた。この検討を踏まえて仕様書としてまとめたもので、官公庁の受・発注の契約図書としてばかりでなく、一般の民間建築物の維持・保全に十分役立つ内容となっている。

一般共通事項、建築く体・仕上げ、電気・機械設備、監視制御・防災設備、執務環境などの項目で構成されている。

この仕様書の発刊を機に、講習会を開いて普及に乗り出すことにしている。名古屋での講習会は２月23日、愛知県産業貿易館。

ＮＴＴ新宿ビルに７グループへ参加招請 米建築集団が本格上陸へ

米・建築集団が本格上陸する――。日本電信電話（ＮＴＴ）は、ＮＴＴ新宿ビル設計業務（プロポーザル）の競争参加招請者を決め、１月25日付で通知、公告した。１月12日に締め切った競争参加希望者の募集には10グループが応募、今回、そのなかから７グループを指名した。指名をうけたのは、「シーザー・ペリ　アンド　山下　アソシエィティッド　アーキテクツ」、「スタビンス・三菱地所　共同企業体」、「ＮＴＴ新宿ビル設計　ＣＲＳＳ・現代建築・織本・建築設備・電通共同企業体」、「ＳＯＭ・Ａ＆Ｔ　設計共同体」、「ＨＯＫ・日総建・総合設備コンサルタント設計共同企業体」、「レオ・ア・デイリー　アンド　アソシエイト」、「リチャード・マイヤー、磯崎新　共同体」――の７グループ。海外建築家のそうそうたるメンバーが参加するプロポーザルとなった。プロポーザルの提出は、通知日から起算して40日間後の３月上旬、３月下旬までに審査、契約を決める予定である。

総合タイルメーカー
kamiyama

ヒューマニティがベースです。

kamiyamaのコーポレートマークは、人間と技術と企業と製品とが一体になって、力を合わせていく“和進(調和精神)”の象徴です。また拡がる未来への可能性と人の成長プロセスとに大切な環境要素として、コーポレートカラーをブルーに選定。次世紀への大いなる情熱をこのマークに込めてkamiyamaは歴史の重さと未来への新鮮な視点を融合させた、真に快適な《まちづくり》に推進してまいります。

上山製陶株式会社

本社工場　岐阜県多治見市上山町1丁目8番地　TEL〈0572〉大代表22-8111 〒507
FAX〈0572〉22-8119
名古屋営業所　名古屋市千種区今池2丁目1－33　TEL〈052〉731-0023・2152 〒464
FAX〈052〉731-7145

編集後記

●厳しい冬の寒さも束の間、暖かい風が吹きはじめています。2月の総選挙は、投票率 73.27%という国民の高い関心の中に行われましたが、日本の社会を象徴するかのように大きな変化はない常識的な結末と終わりました。それでも個々には、ベテランの引退、落選。133の新人の進出など、新旧交代の流れは大きくありました。

●ＪＩＡも新しく林昌二氏（日建設計副社長）の会長就任。東海支部も税田公道支部長から八木利喜彌支部長へのバトンタッチ。それに愛知部会長の改選と新しい体制づくりがはじまっています。役員も大幅な改選で一新されるとのことです。

●人と人、二人が出あえば組織のはじまりです。そして、人と人のかかわりが政治となります。一方がつねに他に対して主導権を握ったり影響を与えたり、自分の目的に他人を従わせようとします。それを友好的にしようするときもあれば激しく議論しあって、その関係づくりにつとめます。

●個人レベルならばともかく、ＪＩＡのように多数の会員を擁し、一定の目的をもった団体の場合は、この政治は大切です。会員と会員との関係づくりが、そのまま会の性格、会の姿として周囲に認識されてしまうからです。

●ＪＩＡはたんなる建築技術者の集まりでなく建築家の団体です。建築職能の確立をめざして組織された集団です。とりわけＪＩＡの代表となり役員となる人が、会の姿、性格を体現します。新日本建築家協会はあの人が代表となっているから立派な団体だと理解します。あの人ではたいした団体ではないとウワサをします。周囲の人はそのように見ます。その意味で役員の選出は、会員の信頼に応え得る人を慎重に選んでいただきたいものです。外から見ても恥ずかしくない人をぜひ選んでいただきたいと期待します。

●ＡＲＣＨＩＴＥＣＴもそうした新しい役員の血によって、生き生きとした血が流れ愛知部会会員の団結の軸となるよう一層頑張っていきたい所存です。建築家をとりまく状況は困難です。しかし、ＡＲＣＨＩＴＥＣＴは建築家の未来に希望をつなぎ、建築家の職能確立をめざす力強い松明（たいまつ）の役割を果たしていきたいものです。

ARCHITECT
第18号
発行日　1990・3・1（毎月1回発行）
定価　３８０円
発行所　社団法人 新日本建築家協会
東海支部愛知部会
発行責任者　栢本良三
編集責任者　森　鉦一
編集　愛知部会ブリテン委員会
建築ジャーナル
名古屋市中区栄四丁目3番26号
TEL (052)263-4636 FAX 251-8495